

〔資料〕

薄田泣菫宛

芥川龍之介書簡（未発表）

武田寅雄編

まえがき

詩作から遠ざかった薄田泣菫は大阪毎日新聞社に入社、大正四年十月学芸部副部長、同八年七月学芸部長に就任、大正末期までに「大阪毎日新聞」・「サンデー毎日」誌上に多くの新進作家を紹介した名編集者であったが、最初に彼が着眼したのが芥川龍之介であった。大正三年第三次、大正五年第四次『新思潮』発刊以来、異色ある短篇作家として漸く世の注目を集めていた龍之介の才能を高く評価し、その将来を嘱望して大正六年十一月には大阪毎日新聞紙上に「戯作三昧」を発表させ、翌七年二月同社々友となったのも泣菫の推輓によることは世に広く知られている通りである。當時龍之介は横須賀の海軍機関学校の英語教官を勤めながら創作に精進していたが、教職のために創作に専念することが出来ないで泣菫に一書を送って大阪毎日新聞社の社員に採用して貰い生活の安定を得て創作に専念したいと依頼している。（書簡「三三二」大八・一・一二）これは三月に実現して、出勤はしないが作品を毎日新聞に発表する約束で月俸百三十円の社員になり、以来大阪毎日新聞には毎年作品を登載することになった。すなわち「路上」（大八・六〇八）・

「素戔鳴尊」(大九・四〇六)・「奇怪な再会」(大一〇・一)等がそれである。旧師夏目漱石の朝日新聞社における地位に倣ったものか。また大正十年には中国文学に造詣の深い龍之介を中国に派遣して、新進作家でありながら、当時としてすでに珍らしかった「文人趣味」を持つ彼に旅行記を書かせることが企画された。彼はこの企画により三月から七月まで中国各地を巡遊し、彼地の著名な文人を訪れたり、史蹟名勝を探って独特のユニークな觀察による旅行記「上海游記」を八月から九月に涉つて大阪毎日新聞紙上に連載、翌十一年一月〜二月には「江南游記」を同紙に、十三年八月には「長江游記」を『女性』にと書き継いだ。

処で泣菫の長男薄田桂氏所蔵の泣菫宛龍之介書簡は曾て芥川龍之介全集編纂の折に岩波書店の同全集編集部に貸与され、全集に採録されたものである。

然るに数年前薄田家所蔵の明治大正の文人の書簡を披見の際芥川書簡に全集未収録のものがあるのを発見し、その後調査の結果、書簡六、「即席歌」と題する短歌十一首が未発表であることが解つたのでここに資料として収載するものである。

〔一〕〔大正六年九月二十日横須賀より〕

原稿用紙で御免蒙ります

小説の件お引うけ申します

右御答へまで

頓首

九月廿日

芥川龍之介

薄田泣菫様

二伸 長さの増減をあらかじめあてにせずに御出し下さい

〔注〕大正六年九月二十日付で横須賀より発信したものに松岡譲宛のものがあるが*（一九五）この書簡は同日発信になっている。この文面で引受けた作品は十一月「戯作三昧」となつて大阪毎日新聞紙上に連載された。（*（一）で示した数は岩波新書版全集所収書簡番号、全集一六巻～一八巻）なお松岡宛書簡〔二一〇〕参照。

〔二〕〔大正八年六月～七月（推定） 田端より？〕

拝啓新茶話難有頂きました 今書いてゐる小説が思はしくないにつけあれだけのものを殆毎日のやうに御書きになる御手際に大に羨望を感じてゐます

とりあへず御礼まで

龍之介

薄田様

〔注〕大正八年六月玄文社刊行の『新茶話』を贈られた礼状である。芥川はこの年六月から八月にかけて大毎紙上に『路上』を連載しているが、執筆意の如くならず、七月三十日付泣菫宛書簡〔四〇八〕にも「『路上』の出来どうも思はしからず少しも早く纏りだけつけて切り上げたけれど後の小説の都合は如何にや」とか、同じ書簡の二伸にも「『路上』に気を腐らし何をして面白くなく甚閉口致居候」と書き送っているくらいで、泣菫が大正五年以来大毎の夕刊に殆んど毎日随筆を書き続けそれが『茶話』（洛陽堂大五）『後の茶話』（玄文社大七）として纏められ、今又『新茶話』が出版されたのを見て、同じ文筆家として羨望に耐えなかつたものであらう。

〔三〕〔大正八年十月二十日田端より〕

拝復

印鑑遅くなつて何とも申し訳ありません あゝ云ふ仕事はどうも氣乗りがしないものだから余計愚図々々してしまうのです これからチエスタトンでも読んで元氣をつけてから一氣に片づけます

御申越しの件早速交渉した所が佐藤春夫は当分どこへも書けさうもない由谷崎潤一郎は年内一ぱいに原稿を送る約束をしました就いて前借百円程したいと云つてゐますが然る可く御取り計らひ下さいませんか目下大阪朝日は二円五十銭中央公論は三円の原稿料を払つてゐますからその位の割で原稿を買つて下さるやう願ひます

谷崎はもし前借が出来れば百円に就き何枚ときめて頂くとその枚数或はそれ以上の枚数の作品を御送りすると云つてゐました 猶御返事は直接本郷区曙町十 谷崎方へ願ひます

江口にはまだ交渉しませんが多分大丈夫だらうと思ひますもう前に一度頼んで承諾を得た事があるのですから

事によると里見の原稿も貰へるかも知れません これはまだはつきりした話が出来ずにゐますが物価騰貴につき方々の原稿料が昂つたやうですから杜の原稿料もそれと釣合をとれるやう御盡力を願ひます
来年は素戔鳴尊を書きます

頓首

十月廿日

芥川龍之介

薄田淳介様

〔注〕この書簡は十月十五日小島政二郎宛書簡〔四三五〕の次に入るべきものである。文中「あゝ云ふ仕事」と言うのはこの年三月に大阪毎日新聞社々員になっているので手続上の書類をさすものかと想像されるが詳しいことは解らない。この書簡によって泣董が龍之介を通じて在京の作家達に執筆を依頼していたことが解るが、龍之介はこれを面倒がらずに斡旋これ努めているのは、こういうことにも案外興味があつたので、芥川といえは書齋派の文人墨客のように思い勝ちであるが案外ジャーナリストとしての才もあつたのではないかと思われる。文末に述べられている「素盞鳴尊」は翌大正九年四月から六月にかけて大毎に連載されている。なお龍之介は入社と共に「入社」の辞を書き送ったが、記事幅湊の爲掲載されなかつた経緯は泣董が『草木虫魚』の中で述べている。

〔四〕「大正十年八月十七日（推定） 田端より」

敬啓

原稿あるだけさし上げます依然腹工合あしき所へ雅俗の用雲集致し辟易の外無之候これからどん／＼送る氣に候高木氏の紀行を見て僕大いに驚きましたあすこに書いてあるやうな事は支那旅行中未嘗一度も僕には氣がつかつたからです同時に又高木先生も僕の紀行を御一読あつたら同様に不思議な氣がしないでせうか 計算書も少し御待ち下さい唯今病体煩にたへず手紙の返事も書かずにゐます

頓首

八月十七日

病 我 鬼

薄田先生梧下

〔注〕この書簡は八月三日香取秀真宛〔七四七〕の書簡の後に書かれたもの。この年三月より七月にかけて大阪毎日新聞社より海外視察員として中国に派遣され、彼地で発病、上海で入院するなど帰国後も健康優れず、その中を押して八月より九月に「上海游

「記」を執筆した時のものである。文中高木先生とあるは中国研究家高木陸郎氏と思われるが詳しい事は解らない。計算書とは中国旅行の費用請求の為の計算書で上海での入院費を含めて、新聞社で支払う事になっていた。この後九月八日付泣菫宛書簡〔七五二〕には「上海游記」を終り次の「蘇杭游記」執筆の間に「瘦癯一層瘦せて蠅螂の如くなつてゐる」ので一週間「息を入れさせて頂きます」と書き送っている。彼の健康が急角度に衰えて昭和二年の自殺に至る傾斜が始つていたことがうかがえる。

〔五〕「大正十一年一月十三日（推定、封筒に一月十三日とあるが本文日付なし）田端より」

拝啓

如何なる訳か今日御手紙を拝見しました日附がない為何日に出たのかわからないのですがまだ私の支那紀行の原稿一回も来ない由ありますからずっと前のだと思ひます郵便屋の遅滞か女中の怠惰か今日兎に角拝見したのですその中に入院病氣費用はいくらか云々とありますがそれは精算書中に書いた筈です病院の受取りも送つた筈です次に又如何なる訳か社から四百何円だかお金が来ましたあれは何の御金ですかうす気味悪い故伺ひますそれから原稿は九回以後毎月一回づつ送つてゐます

芥川龍之介

薄田淳介様

〔注〕この書簡は、大阪毎日新聞に「江南游記」を書いたのが大正十一年一月〜二月であるから大正十一年一月十三日付田端よりのものと推定して支障ないと思われる。同日渡辺庫輔宛書簡〔七九七〕があるが、これはそれと同日の発信になっている。文中「入院病氣費用云々」とあるのは、大正十一年十一月二十四日付泣菫宛書簡〔七八七〕中「なほ旅費の概算表は今日会計部へさし出しました」とあるのに照応する。

〔六〕〔大正十一年二月十五日（推定） 田端より書簡にて書き送ったもの〕

即 席 歌

原稿を書かねばならぬ苦しさに瘦すらむ我をあはれと思へ

雪の上にふり来る雨か原稿を書きつつ聞けば苦しかりけり

「甘酒」の終りは近し然れども「支那旅行記」はやまむ日知らに

さ庭べの草をともしみ椽にあれば原稿を書く心起らず

作者我の泣く泣く書ける旅行記も読者、君にはおかしかるらむ

赤玉のみすまるの玉の美^はし乙女愛で読むべくは勇みて書かなむ

支那紀行書きつつをれば小説がせんすべしらに書きたくなるも

小説を書きたき心保ちつつ唐土日記をものする我は

原稿を書かねばならぬ苦しさに入日見る心君知らざらむ

のんきなるA、K論をする博士文章道を知らず卑しも

薄曇るちまたを行けば心うし四百の金も既にあまらず

頓首

澄江堂主人

二月十五日

〔注〕この歌稿の日付二月十五日は龍之介が「上海游記」を大正十年八・九月に書き、翌年一・二月に「江南游記」を書いているので、この旅行記執筆中の作として大正十一年二月十五日と推定。紀行文執筆に難渋した様子がよく現れている。なお書簡〔七五二〕によると新聞に連載した紀行文は大阪毎日新聞社より出版される予定であったが、後大正十四年十一月に「上海游記」ほか四篇をまとめて改造社から『支那游記』として出版された。

〔七〕〔大正十五年五月三十日田端より〕

拝啓過日は泣董文集御恵投下され難有く存じます。装幀が上等で紙が上等なのに驚きました。これからぼつぼつ拝見致します。なほちよつと鶴沼へ行つてゐた為御礼状が遅れ申訳なく存じて居ります

鵜沼所見

さみだれや青柴つめる軒の下

五月三十日

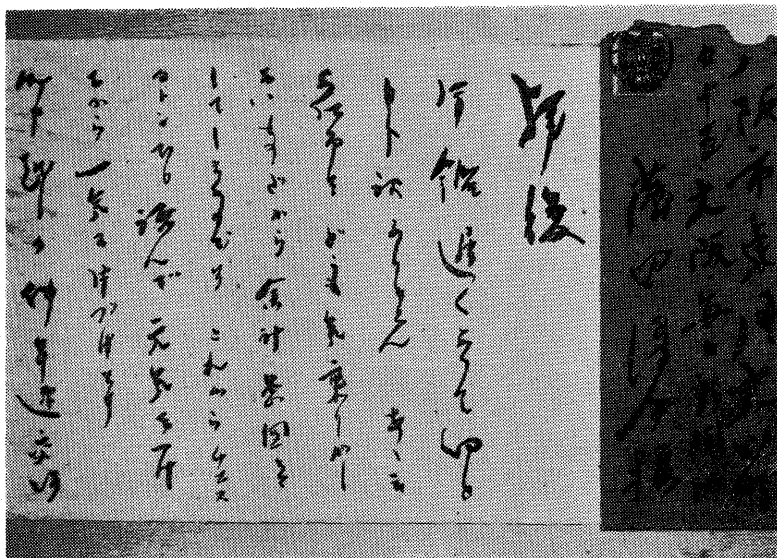
芥川龍之介

薄田様

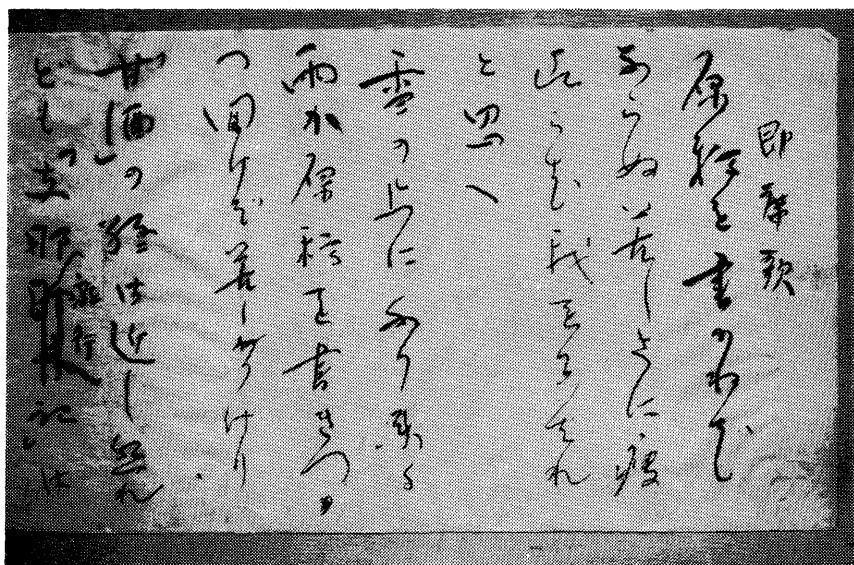
〔注〕大正十五年五月三十日には室生犀星宛書簡（一二四九）があるが、これは同日付発信のもの。「さみだれ」の句は犀星宛書簡の文末にも記されている。なお『泣菫文集』は五月八日に大毎東日両社から出版された九冊目の随筆集である。

付記――

芥川龍之介の泣菫宛未発表書簡はこの他に昭和四十二年九月発行の『日本文芸研究』第十九卷第三号に関西学院大学の
水谷昭夫氏が、泣菫の長女満谷まゆみ氏所蔵の二通を紹介された。なおこの稿執筆に当り資料閲覧に便宜を与えられた
薄田桂氏に感謝致します。また調査整理等に吉野順子君、次男 信の助力を得たことを付記しておく。



本資料三の冒頭の一部



即席歌冒頭の一部